

ロボットクリエイター

「一度くらい、

高橋研究室

プロフィール

1975年生まれ。2003年京都大学工学部卒業と同時に「(株)ロボ・ガレージ」を起業し京大校内入居ベンチャー第1号となる。

代表作にロボット電話「ロボホン」、ロボット宇宙飛行士「キロボ」、デアゴスティーニ「週刊ロビ」、グランドキャニオン登頂の「エボルタ」など。ロボカップ世界大会5年連続優勝。米TIME誌「2004年の発明」、ポピュラーサイエンス誌「未来を変える33人」に選定。「エボルタ」によるグランドキャニオン登頂、ルマン24時間走行等に成功しギネス世界記録認定。

(株)ロボ・ガレージ代表取締役、東京大学先端研特任准教授、大阪電気通信大学客員教授、(株)グローバル社外取締役、ヒューマンアカデミーロボット教室顧問。

TAKAHASHI

高橋

TOMOTAKA

智隆 氏

博打を打ってみるのも面白いですよ」

京大に入るまで

—京大を目指すこととなった経緯を教えてください。

もともとは立命館高校から内部進学で立命館大学の産業社会学部という文系の学部に入り、そのまま就職しようと思っていたらバブルがはじけてしまったんです。バブルのときは今と比較すると文系就職がはやっていて、たとえ理系学部に通っていたとしても、給料のよい銀行や証券会社に就職するような時代でした。

ならば僕もみんなと同じように文系でいいかなと思って進みましたが、バブルがはじけしまったため、楽しく儲かるような虫のいい話はなくなってしまったんですよね。そこで、やはり好きなことを仕事にしようと思い、エンジニアになろうとメーカーへの就職を志望したのですが、第1志望の企業には落ちてしまいました。それで、やっぱり工学部に行っておくべきだったと反省し、予備校に1年間通ってセンター試験を受けて京大工学部を受験し入りなおしたという、そんな経緯です。

—なぜ大学を卒業されたにもかかわらず、再受験という道を選んだのですか。

昔、ヒッチハイクをしたり懸賞で当たったものだけで生活をしたりするなどさまざまな無茶に挑戦する「電波少年」というバラエティ番組があって、その中に難関大学合格を目指そうっていう企画がありました。それと同じで、自分の人生を客観視するような気分で大学受験をしようと思ったんです。というのも、立命館大学にいわゆるエスカレーター式で入って大学受験を経験していなかったの、受験勉強自体にも興味をもっていたんですよね。僕が通っていたような大学付属の高校ではみんなそんなに勉強しない一方、大学生みたいな遊びをもう高校生のうちに経験していましたから(笑)。それに、就職活動をしてみると、大学の名前がいかに大きかっていうのがわかるんです。そういう社会の仕組みなんだと。ならちょっとがんばってでも京大か東大に行った方がむしろ楽だと感じたのもありますね。

—初めての大学受験勉強ということで苦労はありませんでしたか。

僕の場合、受験に対する悲壮感があまりなかったんですよ。本当は遊びたいのに勉強しないといけないとか、何浪までに合格しなきゃとかいうのはありませんでした。というのも、既に1回大学を出ていてもういいおっさんになっているので、もうちょっとおっさんになったところでほとんど差はないわけですから。最初に両親にその話をしたときは、それまでの信用のなさもあってなかなか理解してもらえなかったですね。ただ、両親がともに京大卒で、僕を含めた兄弟の誰かには母校に行ってほしいと思っていたらしく、その気持ちをうまく使って京大を受験する許可をもらいました(笑)。年齢的にも暗記科目はしんどかったですが、論理的に考えないといけないものについては得意でしたし、たぶん高校生のときよりも理解力が高まっていたので、なんとか1年で受験を乗り切ることができました。

はみだし
すてーじ

さむくて朝がづらい
⇒着る毛布を使って寝ようしてみたらどうでしょうか。

(法・1 みかん)

(朝寒くてもそのままの格好で活動できますし;編)

はみだし
すてーじ

はみだしすてーじのマスコットはよ
⇒らいふすてーじ編集部には一応マスコットキャラクターが存在しますよ。

(工・院 へこ)

(そのうちどこかで出てくるかも;編)

京大での大学生活

—京大で改めて大学生活を送った中で
の思い出はありますか。

実際に京大に入って気づいたのですが、工学部には医学部や法学部と違って僕みたいな入りなおしの子が他にはいなかったんです。だから、クラスでもかなり浮いていたと思います。あと、クラスメイトの中には数学がものすごくできる人とか、テスト前にノートをばっと見るだけですべてが丸暗記できてしまうような能力をもっている人がいて、とても驚いた記憶がありますね。僕自身は、第二外国語などの一般教養科目の一部は立命館大学でとった単位を転用できたので時間割に少し余裕があったのと、今さらサークルに入って何かをするつもりも当然なかったんで、余った時間は1人でごそごそとロボットを作っていました。

—こうして、ロボットを作ったことが
今のご自身につながっているのですね。

そうですね。京大の中にベンチャー・ビジネス・ラボラトリー（VBL）という建物があって、そこでテクノアイデアコンテストっていうのをやっていて、応募してみたら優勝しました。他にもVBLでは、産学連携や起業を支援してくれたり、特許相談室をやっていたりして、そこが窓口になっていろいろなサポートをしてくださったんです。それに加えて、当時の副学長の先生がベンチャー・インキュベーションっていうベンチャー用貸事務所スペースを作ってくださったんですが、その第1号として京大の中で事務所を構えて起業することができました。今の僕があるのも、こうしたサポートがあったお陰だと思えますね。



▲思い出を熱く語る高橋氏

現在のお仕事について

—ロボット開発において何かこだわっ
ている点がありますか。

僕はまず僕自身が欲しいものを作りたいと思っています。世の中をよくしようと困っている人を助けようとかじゃないんです。なぜかって、自分ではない誰かを想像して何かをやっても、たぶんまくはいかないと思うんですよ。例えば、僕が女子高生にバカ売れするロボットを作ってやろうと思って作っても、たぶん女子高生は買ってくれないでしょう。まあ僕の場合はそれ以前にロボットが好きだし、自分の欲しいものを作りたいので満足なんですよ。それに、そうやってロボットを作っていれば、自分と同じ感性をもった人から共感してもらえますし。

—高橋さんはなぜ困難なことにも挑戦
し続けることができるのでしょうか。

それは、好きで作っているからです。もともと好きでやっていることが何となくそのまま仕事になっているんです。僕の中では好きなことで食っていけるならそれでいいやっていう感じなのでね。数年前、いよいよロボットがIT産業の次世代を担うんじゃないかって言われはじめたころから本格的な仕事になってきましたけれども、別にこうやって花開かなくてもそれはそれで幸せなんですよ。それこそ僕が作ったロボットのいくつか



▲研究室の工房での作業風景（提供：高橋氏）

は、どこかから注文を受けたわけではなく完全に自分勝手に作った一品ものなんです。そういうものを作っていると、量産して売りたいとかうちのロボットを作ってくれみたいな依頼が来るので、その点アーティストみたいところはありますね。アーティストも買い手がついてから作品を創るわけじゃない、創りたいから創って、それが結果的に商売になるかもしれないしならないかもしれない。それと同じようなものです。

起業のきっかけ

—起業しようと思ったきっかけは何か
ありますか。

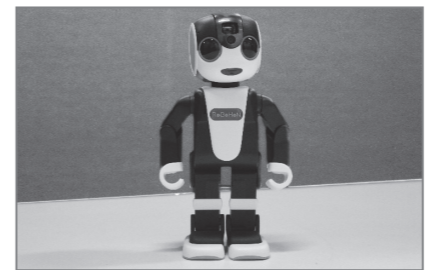
まあ成り行きですね。多くの起業家の人は何でもいいから起業したいと、何か起業のネタがないものかと言って探しまわることが多いと思うんです。でも僕の場合は起業するつもりは本来なくて、どこかに就職して企業の中でロボットを作ろうと思っていたんですよ。ただ、1人でごそごそやっていたら、大学も支援してくれるし、とりあえず起業に挑戦してみて、ダメだったらそのとき就職してもいいのかなという緩い感じで起業を目指しました。京大を卒業しておけば後からでもきつとどこかが雇ってくれるはず、それが大きな保険だと思ったので、起業をすることにあまりリスクは感じませんでした。

もう1つは、京大の卒業式に出たら当たり前ですけどものすごい数の学生が会場にいるわけです。僕は首席でもなんでもなかったんで、そこで卒業証書ももらうわけでもない、となると京大を卒業したところで何の特別感もないように感じました。自分のことが完全に“one of them”、ザコみたいなもののように思えてきて、そのまま普通に“one of them”として行動していてもそれではやっぱりつまらないと思ったんです。例え同じようなことをしているように見えても、京大に入った時点で周りの人たちから一歩抜け出たつもりでいましたけど、先頭集団に行ったらその集団にまだ何千人もいて、そこから抜け出すにはやっぱりユニークなことをしなければいけないなっていうことを感じました。それも起業しようと思ったきっかけですね。

これから目指したいこと

—これから何を目標していこうと思っ
ていらっしゃいますか。

成熟してしまった分野ではあまりやることはないと思うんです。もう面白いテーマが残っていないかもしれないし、たとえ重箱の隅をつついてテーマを見つけて何かをしたところで何のインパクトもないし、それによる金銭的な見返りも



▲昨年10月に公開されたロボット電話「ロボホン」

ないわけです。それに比べると、新しい分野、これから実用化されていこうとしている分野には魅力があると思います。というのも、そこでは、やることなすこと全部が新しいし、インパクトもあって、成功するにせよしないにせよ、何かのアクションが返ってきますから。それが面白いんですよ。つまり、学術研究の段階にあったものがビジネスになる瞬間みたいなのにもすごく面白さがあると僕は思っています。そういう意味でロボットは今ちょうどすごく面白い時期にあるような気がしています。事務機器でしかなかったパソコンが、スティーブ・ジョブズ氏やビル・ゲイツ氏の活躍で一般に広まっていったときと同じような現象がロボット分野にも起きようとしていて、それを自らの手で、自らが関わった製品で実現してみたいと思っています。

京大生に一言

—京大生に対して一言お願いします。

一番優秀な人から起業していくようなアメリカとは違って、日本は京大生のよいうな一番優秀な人たちが一番安泰な大企業とか省庁とかに務めてしまっていて、何かもったいないなと感じています。京大を出ていけば後からどこへでも入れるので、一度は起業のようなリスクをとってみてもいいんじゃないでしょうか。安全だと思っていたところがむしろギリ貧になっていたり、逆に今低迷しているように見えてもこれから発展していくかもしれないですね。株式投資と同じで、高値のピークで買ってあとは損するだけ、みたいな事になっては悲惨です。「京大卒」という強力な保険があるんですから、勝負に打って出てみてください。—ありがとうございました。（高速）



▲「エボルタ」でギネス世界記録を樹立された